

マダイ中間育成の状況観察



小網代湾の中間育成施設でマダイ種苗の全数を調べる作業員



汚れた網から稚魚を移動

(一社)日本釣用品工業会と(公財)日本釣振興会は、四月一日から「つり環境ビジョン」事業をスタートし、優先三事業のうち水中清掃に統いて、調査・放流事業の準備に着手しているが、七月十四日(日)に放流用マダイ種苗の育成を委託している(公財)神奈川県栽培漁業協会を訪ね、成育状況や稚魚の全数計算など作業の様子を観察した。

この日は、つり環境ビジョン事務局の柿沼清英氏と谷剛氏に本紙記者らが同行。同協会・今井理事長が事務室の案内でも、三浦市三崎町の小網代湾に浮かぶ中間育成施設に向かった。

放流事業用のマダイ受精卵三百万粒を四月に入手し、孵化した稚魚は同協会内にある陸上の飼育施設で成育。全長約20mmに成長した稚魚を六月六日に小網代湾の海上筏イケスに移動させた。

イケスでは朝から準備が行われ、中間育成した稚魚の全尾数を計算しながら、稚魚の糞や藻類、ゴミなどを目が詰まつた網を交換する作業が続けられた。稚魚は全長60mm

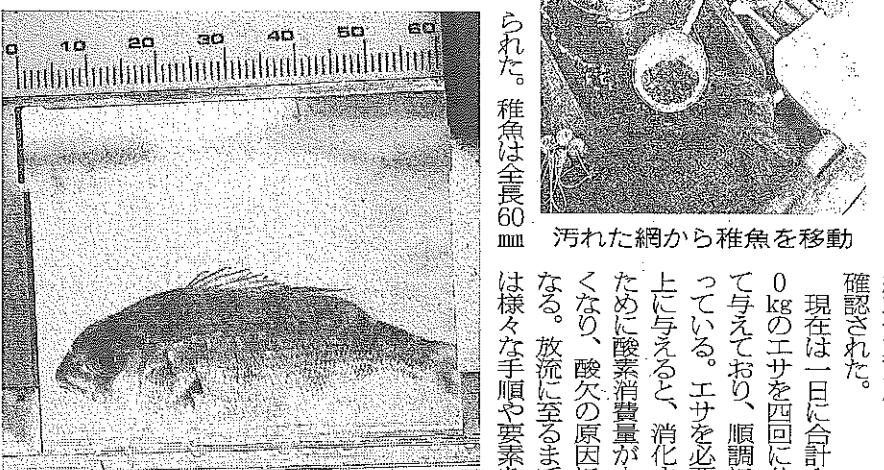
前後に成長し、網で仕切られた八面あるイケスに約三十五万尾いることが確認された。現在は一日に合計120kgのエサを四回に分けて与えており、順調に育成が進んでいる。エサを必要以上に与えると消化するため酸素消費量が大きくなり、酸欠の原因にもなる。放流に至るまでに様々な手順や要素を経て与えており、順調に育成が進んでいる。エサを必要以上に与えると消化するため酸素消費量が大きくなる。酸欠の原因にもなる。放流に至るまでに空になったイケスに稚魚を積み込み行う計画だが、最近は活魚の需要が低迷しているため、現状では正確な入港の日程が決まっていないものの、七月下旬から八月上旬をメドに実施するよう調整している。

最終的には放流地点は定置網の位置や漁業に影響がない海域を漁協に確認した上で決定。運搬船にGPSで場所を指示し放流作業を進める。

同事業とは別に、陸上の中間育成施設で育てているマダイ稚魚を九月上旬から中旬をメドに相模湾一帯に放流する計画。放流魚の成育や分布状況などに関する調査は、様々な角度から検討した結果、マダイの鼻孔隔壁の欠損から放流効果を検証する方針。遊漁船や市場関係者の協力を得ながら実施する。

同協会では、過去に標識放流を行ってきたが、タグは脱落があり、一年で五割、二年でまた五割が脱落し、タグを付けたままの魚はわずかしか残っていないことが考えられる。また、報告率も時間の経過とともに減少する面がある。標識放流では再捕された魚を計算する場合、多くの仮説(推定値)を盛り込まなければならず、精度的に問題があることなどを考慮し、鼻孔隔壁の欠損で放流魚が天然魚かを判別することになった。

放流直前までアクションに見舞われる心配もあり、今後も天候やイワシの魚群回遊、フグなどに注意を払いながら放流に備える。



体長60mm前後に育ったマダイ

リアする必要があり、正直前まで判断するのが難しい面があるという。

つり環境ビジョン用には東京湾に二十万尾のマダイ稚魚を放流する予定。放流はコスト等を配慮し、香川県漁連の活魚運搬船が三崎港に入港するタイミングに合わせて、空になったイケスに稚魚を積み込み行う計画だが、最近は活魚の需要が低迷しているため、現状では正確な入港の日程が決まっていないものの、七月下旬から八月上旬をメドに実施するよう調整している。

最終的には放流地点は定置網の位置や漁業に影響がない海域を漁協に確認した上で決定。運搬船にGPSで場所を指示し放流作業を進める。

同事業とは別に、陸上の中間育成施設で育てているマダイ稚魚を九月上旬から中旬をメドに相模湾一帯に放流する計画。放流魚の成育や分布状況などに関する調査は、様々な角度から検討した結果、マダイの鼻孔隔壁の欠損から放流効果を検証する方針。遊漁船や市場関係者の協力を得ながら実施する。

同協会では、過去に標識放流を行ってきたが、タグは脱落があり、一年で五割、二年でまた五割が脱落し、タグを付けたままの魚はわずかしか残っていないことが考えられる。また、報告率も時間の経過とともに減少する面がある。標識放流では再捕された魚を計算する場合、多くの仮説(推定値)を盛り込まなければならず、精度的に問題があることなどを考慮し、鼻孔隔壁の欠損で放流魚が天然魚かを判別することになった。

放流直前までアクションに見舞われる心配もあり、今後も天候やイワシの魚群回遊、フグなどに注意を払いながら放流に備える。